

C-25 僧服に関する研究 (第四報 仏教伝来当初の時代の法衣について)
大阪女子短大 弓削公子

目的 仏教の日本伝来当初の時代(伝来当初 A. D 538 より嵯峨天皇承和9年 A. D 842迄)の法衣の形状の推移の論究を試みることにする。

方法 仏像、及び画像、実物資料の調査、写真による考察。

結果 日本の仏教僧侶の服装が 中国における客と同様であったことは帰化人達か僧として伝道した故に当然であり、たとえ日本人が僧となろうとも、その師の姿にならざるは必然である。およそ教団の教義は儀容作法を通じてその形の中に存在するともいえるものであるから伝承の僧服に多少の差異が見られるは不思議ではない。滋賀県の延暦寺国宝の伝教大師所用制納(衲)衣の実測に基づいて 埴輪衣服との相関関係及び、正倉院に残る伎楽装束のなかの師子所用の衲の共通性を見い出し、更に各寺院の当時作成された仏像、壁画から形状の發遷をも判明出来た。